

各地で話題の病虫害

サクセスキクイムシ

学名: *Xyleborinus saxeseni* (Ratzeburg)英名: Asian ambrosia beetle,
Fruit-tree pinhole borer

2006年9月上旬、愛知県にあるナシ園で、収穫直前の果実に直径約1mm程の食害痕(穿孔)が見られ、その中からキクイムシと思われる昆虫が発見された。名古屋植物防疫所で同定した結果、サクセスキクイムシであることが判明した。本種は、成虫がナシの幹や主枝に食入することは知られていたが、ナシ果実への穿孔被害の報告は少なく、2005年8月に千葉県、同年9月に栃木県で確認されている。

雌成虫は体長約2mm、細長い円筒形で、少し光沢のある茶褐色から黒褐色である。通常は年1~2回発生し、樹内越冬した成虫が4~5月頃脱出して倒木などに深く穿孔する。孔道の直径は約0.7mmで、食入後に粉状の細かい木屑を排出する。果樹類ではリンゴ、カンキツ、ナシ、モモ、スモモ、カキ、クリなどの弱った枝幹部への穿孔被害が報告されている。ナシ果実への被害は、成虫が収穫間際の成熟果に食入することでおこる。

防除対策としては、樹勢の衰えた樹の枝幹部を好んで食入するため、日頃から肥培管理等により樹勢維持を図ることが大切である。被害果の認められた樹の周辺に被害樹がないかよく観察し、枝幹への食入孔が多く衰弱の激しい樹は、発生源となるため早急に伐採処理する。また、成虫の飛来は4~5月に多いため、枝幹に被害が見られる場合は、登録剤のマラソン・MEP乳剤を樹幹部に散布し、本種の食入を防止することも重要である。



雌成虫

被害果

食入孔(拡大)

写真提供: 愛知県農業総合試験場

アカマルカイガラムシ

学名: *Aonidiella aurantii* (Maskell)

英名: California red scale

2005年1月、静岡県内で温州ミカンに寄生するマルカイガラムシ類が確認され、東京農業大学によりアカマルカイガラムシであると同定された。本種は日本では九州、南西諸島、小笠原を中心とした暖地に分布することが知られていたが、1999年に愛媛県、2000年に三重県で発生が確認されている。

本種は世界中の熱帯・亜熱帯地域(主にカンキツ栽培地域)に広く分布し、寄主植物の範囲は多くの科にわたっている。介殻は淡黄~淡赤褐色で、雌成虫は直径2mm前後のほぼ真円形であり、雄蛹は長径1mm前後の長円形である。卵は雌成虫の殻の下に生み出され、ふ化した幼虫は寄生植物上に移動し定着後、白いロウ物質や赤褐色の殻を分泌し体をつつみ成長していく。雌は幼虫から無翅の成虫になり、そのまま寄生場所に留まる。雄は幼虫から蛹を経て一対



介殻 左: 背面 右: 腹面 葉における寄生状況

の翅を持つ有翅成虫になる。

本種は年間で3~4回発生し、

第1世代は5月~6月、第2世代は7月~9月、第3世代は10月~12月にそれぞれ発生する。第1世代幼虫は主に枝葉に寄生し、第2世代以降は果実にも寄生する。枝葉への寄生密度が高くなると枝枯れを引き起こし、果実に寄生すると外観を損ね、商品価値を著しく低下させる。

本種に使用可能な薬剤は各種登録があり、冬期のマシン油乳剤散布や第1世代及び第2世代の若齢幼虫が最も多く寄生している時期(6月及び8月頃)に薬剤散布を行うことが防除対策として有効である。

写真提供: (中央・右): 静岡県病虫害防除所 桑田典子氏